

2 0 2 1 年 度

第 1 回

2 科 4 科

入 学 試 験 問 題
国 語

試験時間 45分

注 意

- 試験開始の合図^{あいず}があるまで、この問題冊子^{さつし}を開いて見てはいけません。
- 問題は□から□の13ページにわたって印刷してあります。足りないページや、印刷が分かりづらいところがあった場合は、手をあげて監督^{かんとく}者に申し出てください。
- 解答用紙と問題冊子の決められた場所に受験番号を記してください。
- 答えはすべて解答用紙の決められた場所に記入してください。
- 答えを直すときは、きれいに消してから新しい答えを書いてください。
- 試験終了後、監督者の指示にしたがって解答用紙を問題冊子とともに提出してください。
- 特に指示の無いかぎり、句読点や記号は1字で数えます。

佼成学園女子中学校

受験
番号

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「わたし」(花岡)は中学二年生。九月にマレーシアから二年半ぶりに帰国してまだ二週間。周りから「帰国子女ぶっている」と思われなにかびくびくしながら学校生活を送っている。ある時、ひよんなことから中学三年生の佐藤先輩に誘われ、一緒に短歌を作る散歩に出かけ、短歌作りのパートナーとなることを約束した。次の場面はその二日後である。

翌日の昼休み、佐藤先輩は図書室の書架の整頓をしていた。

「昨日、^{※1}吟行するんじゃないですか？」

わたし、待ってたんですけど、ということアピールするように、わたしは少し^(a)口をとがらせた。

「もう行かないよ。」

「え？」

「花岡さんと吟行はしない。」

佐藤先輩はわたしのほうを見ず、本の背ラベルに目を向けたまま言った。

「わたしといるところを見られるの、嫌なんですよ？」

ああ。

昨日の給食の時間、自分の口から飛び出た言葉を思い出す。

『無理やり連れていかれるだけなんだよ。ほんとは迷惑！』

あの言葉が聞こえていたなんて……。

わたし、サイテーだ。

「ごめんなさい。あの……。」

ちがうんです、と言おうとしたけれど、言えなかった。

何も、ちがわないじゃないか。

15

10

5

下級生からも変わり者扱いされている佐藤先輩と、仲よくしていることを周りに知られるのが嫌だった。

わたしまで変わり者の^{※2}カテゴリーに入ってしまったかと思っただけなのに、二人でいるときは仲よくしたいなんて、^(b)虫がいい。

佐藤先輩の気持ちなんて考えていなかった。

「わたし、周りから自分がどう呼ばれているかなんて知ってるよ。いばつて^{※3}督促状を持ってくるから、督促女王。どの教室も、わたしが入っていくと嫌そうな顔をする。」

「わたしは……。」

「いいよ、自分の身を守りなよ。わたしとちがって、中学生活まだまだ続くんだから。^①居心地いい寝床は必要だよ。」

佐藤先輩はくちびるだけで微笑んでいた。怖^{こわ}いと思った。だってそれは、本当の笑顔じゃないと分かったから。

昼休みだけじゃない、^②何かもつと大事なものの終わりのような予鈴^{れい}が鳴る。^{※4}

鈴が鳴る。

「それじゃあ。」

佐藤先輩はわたしの横をすり抜けた。

「じゃあ^{※5}七海さん、戻りますね。」

「お疲れさま。今日はもう一人の当番の服部さん来なかったわねえ。」

「来週はサボらないように言っておきます。」

佐藤先輩と七海さんのやり取りが耳に届く。

わたしも教室に戻らなくちゃ。でも、動けない。

そのとき、本棚に並んでいる一冊が目にとまった。

何だか懐かしさが胸に広がって、それがマレーシアの日本人学校の図書室で読んだ小説だと少し遅れて気がついた。

40

35

30

25

20

その本を見つめていると、

「あら、花岡さん。もう本鈴鳴るよ。教室戻って……ていうか、どうしたの？」

七海さんに声をかけられた。

「あ、えと、その。これ借りたくて。」

わたしはとっさにごまかし、人さし指をかけて本棚からその本を抜き出した。

この本を胸に抱えて目を閉じたら、マレーシアの日本人学校の図書室にワーブできればいいのに。

そんなファンタジーの世界のようなことを考えたなら、涙が出てきた。

「この本、マレーシアで通ってた学校の図書室にもあったんです。わたし……マレーシアに帰りたい。」

わたしは日本に帰ってきてから、周りの目ばかりを気にしている。

どうして。どうして。

わたしは悔しかった。

飛行機で運ばれる間に、自分の性格が変わってしまったような気がする。

マレーシアはいろんな民族がごっちゃに暮らしている多民族国家だ。

③ わたしは、マレーシアには東南アジア系の顔の人たちだけが住んでいると思っていた。でも、そうじゃなかった。

電車に乗っても、一つの車両にいろんな人たちがいた。

トゥドゥンと呼ばれるベールを被ったイスラム教徒の女性たち。そのトゥドゥンはカラフルで、数人で身を寄せている後ろ姿は、きれいな羽の鳥たちみたいに見えた。

その前でおしゃべりしているのは、わたしたちとよく似た中華系の人

たち。(でも、髪型や服のセンスとか、どこか日本人とちがう。)

ドアに寄りかかっているのは、目のぱっちりしたインド系のお兄さんたち。

マレーシア語も、英語も、どこの国か分からない言葉も混ぜこぜで聞こえてきた。

そんな車内から、窓の外の景色以上に目が離せなかった。

タブンカ、なんていう言葉はまだよく知らなかった。でも、一つハツキリ言えることは、わたしの気分がかなり上がったということ。

すごい、すごい、すごい。

暮らし始めると何を見ても新鮮で、サイダーの泡みみたいな刺激があった。

扉を完全に閉じる前に走りだしちゃうバス。

舗装がポッコポコのアスファルト。

屋台で売られているカエル肉の料理。

鼻にパンチを食らわすドリアンが山積みになった出店。

バッサバッサと葉が生い茂るヤシの木たち。

大自然と都会が隣り合わせにあって、街の中心にはペトロナスインタワーと呼ばれるトウモロコシみたいな形のビルがそびえ立つ。

蜘蛛の巣みたいな大きなヒビを窓ガラスに入れたまま走っている電車もあつたつけ。

解放感、というのかな。

④ ここに来ることができてすごくラッキーだと思った。

みんなで同じものを持たなくちゃ、同じようなタイムで走らなきゃ、同じものをおいしいと思わなきゃ。

マレーシアに来る前のわたしはそんな思いにとらわれていた。それは

四年生の後半あたりからわたしの胸に蜘蛛の巣のように張りついていた。

でもここは、人とちがついていても仲間外れにされちゃうような場所じゃない。マレーシアで、わたしたち兄妹きょうだいが入った日本人学校もそうだった。

インターナショナルスクールってガラじゃないよね、とか言ってお父さんとお母さんが決めた学校だったけれど、学年の隔へだてはなくて自由だった。一つ二つの歳としの差なんて気にせず、よく一緒に遊んでいた。

なのに、今のわたしときたら。
人とちがうことを怖がって、人とちがうことを否定して。

こんな自分、嫌だ。

「花岡さん。」

とん、とん。七海さんは横からわたしの背中を優しくたたき、

「その本、私も好きだよ。」

ほんわかした口調で言った。

「私が中学生のころに発行された本なの。主人公の女の子に、自分を重ねて読んでた。」

わたしは（A）七海さんの顔を見る。

大人の人の年齢ねんれいってよく分からないけど、七海さんはまだお姉さんと呼べるくらいには若い。白い肌はだには少しソバカスがあつて、赤いフレームの眼鏡の奥おくの目がどんぐりみたいに丸くて茶色い。

それでも、この人が中学生のころって、きつと十年以上前の話だ。

「私は、昔から本が好きだったから、休みの日は一日中、自転車に乗って図書館巡めぐりをしてたの。たいていの図書館にその本は置いてあつた。それがすごく心のよりどころになった。嫌なことや悲しいことがあつて

115

110

105

100

95

自分の心がグラグラになつても、その本は私が行く先々で、どこでも同じ※6凍りんとした姿で図書館にある。それを見ると、安心して、私も自分の気持ちを立て直すことができたの。」

マレーシアの日本人学校の図書室にも、この中学校の図書室にも。遠く離れた場所でも、この本は変わらない……。

そういえば、マレーシアの日本人学校に編入したばかりのころ、日本でもよく読んでいた本が図書館にそろつていて、何だかほつとしたわけ。今はその逆だなんて笑つてしまう。

「佐藤さんね、編入してきたあなたのことを気にしてたよ。佐藤さんも転校生だったから、花岡さんの心配や緊張きんちやうを和らげようとして、それで吟行に誘つたんじゃないかな。ただ、不器用だから、あんな命令口調になつてたけど、花岡さんと仲よくなりましたかっただと思つよ。」

わたしと仲よくなるうと……？

もし、それが本当だったら。単※7に 出席番号が三十一だからだけ

じゃないとしたら……。

わたしはひどいことを言ってしまった。

そう思つたとき、本鈴が鳴つた。

「教室に戻れそう？」

わたしはうなずいた。

教室に戻る途中、埃ほこりの転がる廊下ろうかを急ぎ足で進みながら考える。

佐藤先輩あやまに謝あやまらなきや。

どうにか、仲直りをする方法……。

気持ち伝えるにはどうすればいい？

月曜日の朝、わたしは三年A組の後ろの扉を（B）開けた。

140

135

130

125

120

佐藤先輩の目印はつややかなロングヘア。教卓の目の前の席で本を開いているのが、すぐ目に入った。

「失礼します！」

思った以上に大きな声が出て、教室にいる人たちの視線がわたしに集まる。

怖くない、怖くない。わたしは自分に言い聞かせ、（C）目指す席まで進んだ。佐藤先輩は振り返らないままだ。

「あの、これ！」

わたしは^{※8}タンカードを渡した。

「何？」

「この間の続きを見てみてください。わたしの短歌が書いてあります。」

それだけ言うと、佐藤先輩の言葉を待たずに、教室を出た。

わたしの伝えたいことは、あの短歌に託してあるから。

『^⑤ジャランジャラン 願いを込めてもう一度いっしょに歩いてみたい道です』

伝わりますように。

（こまつあやこ『リマ・トゥジュ・リマ・トゥジュ・トゥジュ』）

*本文は作問の都合上、一部表記を改めてあります。

155

150

145

※1 吟行……………ここでは短歌を作るために出かけること。

※2 カテゴリー……………分類。

※3 督促状……………ここでは期限の過ぎた本の返却をうながす手紙。

※4 予鈴……………ここでは午後の授業が始まる少し前に鳴るチャイムのこと。授業開始時に鳴るのは本鈴。

※5 七海さん……………「わたし」が通う学校の図書室司書。

※6 凜とした……………態度が引き締まり、力強い様子。

※7 出席番号が三十一……………佐藤先輩は、「わたし」の出席番号が短歌の字数と同じ三十一だから声をかけたと話していた。

※8 タンカード……………おたがいの短歌を見せ合うためのカード。

問一 (A) (C) に当てはまる言葉として最も適当なもの

を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア ぬっと
- イ そろりと
- ウ ずんずんと
- エ まじまじと

問二 線部 (a) 「口をとがらせた」、(b) 「虫がいい」とあります

が、これらの語句の本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- (a)
- ア 口をとがらせた
- イ 申し訳ないさま
- ウ 面白がるさま
- エ 不満を表すさま
- ア 甘あまえていること
- イ ふざけていること
- ウ 間違まちがっていること
- エ 自分勝手であること

問三

——線部①「居心地いい寢床は必要だよ」とありますが、このときの佐藤先輩の様子はどのようなものだったと考えられますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 他の生徒たちとは違うと思っていた「わたし」にも裏切られたことがわかり、「わたし」に強い批判の言葉を発している。
- イ 陰で自分のことを迷惑だと話していた「わたし」の言葉にショックを受けながらも、皮肉な言葉を投げかけることで強がっている。
- ウ 昨日の発言が聞かれていたことを知りながら、平然と話しかけてくる「わたし」に嫌気がさし、本人の嫌がる言葉で仕返しをしている。
- エ 本当は吟行に行きたいのに周囲に言い訳をしていた「わたし」の様子にいたたまれなくなり、「わたし」と一時的に距離を置こうとしている。

問四

——線部②「何かもっと大事なものの終わりのような予鈴が鳴る」には「わたし」のどのような気持ちが表示されていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 佐藤先輩の表情を見て、自分の発言で先輩を怒らしてしまったことに気づいたが、もうどうすることもできない。
- イ 授業が始まるので教室に向かおうと思ったが、図書館の出入り口で佐藤先輩と七海さんが話し込んでいて気まずい。
- ウ 佐藤先輩の笑顔で誤解が解けたと安心したが、自分を無視して七海さんとだけ話す先輩の姿を見て、気が気でない。
- エ 自分の発言で佐藤先輩を傷つけてしまったことに気づき、このままでは二人の関係が取り返しのつかないものになってしまう。

問五 — 線部③ 「わたしは、マレーシアには東南アジア系の顔の人た

ちだけが住んでいると思っていました」とありますが、この部分から「わたし」の思い出が書かれています。それはどこまでですか。終わりの五字をぬき出しなさい。

問六 — 線部④ 「ここに来ることができてすごくラッキーだと思っ

た」について、次の問題に答えなさい。

(1) 「ラッキー」だと思ったのはなぜですか。それを説明する次の文の() に当てはまる適当な言葉を、本文中の言葉を使って二十字以内で答えなさい。

訪れたマレーシアは、() 場所だったから。

(2) では、日本に帰ってきた今の自分のことを「わたし」はどのように考えていますか。本文中の言葉を使って三十字以内で説明しなさい。

問七 — 線部⑤の短歌「ジャランジャラン 願いを込めてもう一度

いっしょに歩いてみたい道です」についての会話文を読み、()
に当てはまる最も適切な言葉を後から選び、記号で答えなさい。

Aさん この「ジャランジャラン」っていう言葉はなんだろう？ 後に

「願いを込めて」という言葉があるから、神社の鈴を鳴らす音
なのかな……?」

Bさん あ、そんなふうにも解釈できるんだね。「ジャラン」はマレー

シアの言葉で「道」、「ジャランジャラン」で「散歩」っていう
意味になるそうだよ。

Aさん そうなんだね。ということは、きっと「わたし」はこの短歌を

送ることで () という気持ちを伝えようとしたんじゃない
のかなあ。

ア 佐藤先輩と吟行をしたい

イ 佐藤先輩と昼休みを過ごしたい

ウ 佐藤先輩と図書館の仕事をしたい

エ 佐藤先輩とマレーシアに行きたい

問題は次のページに続きます。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

仕事にあつて、技術にないものは山ほどあります。その理由は、技術は仕事から取り出されたのではなく、まったく別のものだからです。

しかし、こういう説明ではわかりにくいでしょう。田植機で苗を移植する技術は、田植えという百姓仕事の発展したものであるかのように考える人のほうが圧倒的に多いからです。しかし、手植えにあつて、田植機での移植にないものは何だろうかと考えないから、そういう説明で納得してしまうのです。

多くの百姓のおばあさんが、田植えは楽しかったと言います。なぜなら、田植えをしながら、みんなと話に花が咲いたからです。ごちそうも用意されていました。

しかし、田植機での移植には、歌も会話もありませんし、そもそも※1 早乙女が植えるほうが稲はよく育つのだという習慣もなくなっています。それは、一人でもできるように、労働時間を節約するために、ただひたすら生産性を上げるために、そういう精神で手植えにおきかえるために開発された技術だからです。

田植機によって節約された時間は、どこで使われたのでしょうか。田植機を買うための農業以外への稼ぎに使われました。あるいは農業経営の規模を大きくするために使われました。また、稲作以外の野菜や果樹や畜産をはじめするために使われました。つまり、分業に使われました。けつして、余裕ができた時間で遊んだりゆっくりするためではありません。その証拠に、田植えのあとや稲刈りのあとに、年寄りたちが温泉に泊まりがけで何日も出かけていた習慣はなくなりました。

私は、田植機の出現などの農業の近代化によってよくなったことばか

20

15

10

5

りを、農政や農学が言い立てることに反発を抱いて、少年時代と青年時代を生きてきました。(1)、近代化によって失っていく世界の豊かさや身にしみるからです。だからこそ、得られたものと失ったものを天秤にかけるぐらいのことはしておきたいのです。仕事が新しい近代化技術におきかえられていくことによって、何をなくしたのかを考えれば、仕事と技術のちがいはわかるでしょう。

数年前、近所の九三歳になるお年寄りの百姓夫婦に、落ち穂ひろいの話を聞いて、飛びあがるほど驚きました。

※2 落ち穂ひろいという仕事は、コンバイン(稲を機械で刈りとって、籾をわらから落とす機械)の登場で、なくなりました。(2)

この自動収穫機械の登場によって、田んぼに落ちる籾や麦粒の数は増えたのですが、なにしろ穂として落ちるよりも、粒で落ちるために、ひろいにくいのです。穂なら一穂ひろえば一〇〇粒はついているのですが、一〇〇粒を田んぼの中でわらをかきわけてひろうのは大変でしょう。何よりも落ち穂ひろいは、それほどの経済的な価値を生みださないのです。

それでは、かつての落ち穂ひろいは、何のためにおこなわれていたのでしょうか。フランスの画家ミレーの『落ち穂ひろい』という有名な絵があります。あの麦の落ち穂ひろいをしているのは、麦畑を耕作してきた百姓ではありません。近所の百姓でない貧乏な人たちなのです。キリスト教の精神では、麦は神からの恵みです。それを独占するのではなく、貧しい人たちとも分かちあうという気持ちがよくあらわれていて、感動します。(3)、それはキリスト教の普及した国のことであつて、日本ではそういうことはないだろうと思っていました。

しかし、気になってたずねてみました。

45

40

35

30

「昔は、落ち穂ひろいはどうしていたのですか」
すると、すぐに、

「ええつ、どうしてですか？」
とさらにたずねました。

「稲刈りが終わりがけるときには、もう畦※4 あぜに袋ふくろを持った人たちが待っていて、私たちが引き上げるときと田んぼに入ってきて、ひろいはじめていた」
と言うのです。

現代では落ち穂であっても、その田んぼの百姓の所有物です。他人が無断でひろっていたら、窃盗※5 せっとうになるでしょう。ところが、かつては米は天地（自然）からのめぐみだというのが日本人の農業観でした。百姓はけっして米を「A」とは言いませんでした。「とれる」「できると言った意味がわかるでしょうか。人間が主役ではなく、百姓はめぐみを受けとるのです。したがって、百姓だけが独占的に受けとるのではなく、貧しい人と天地のめぐみを分かちあっていたのです。じつにキリスト教の精神と似ているでしょう。日本と西洋と離れていても、百姓③という仕事の共通性に胸が熱くなります。」

このように、稲刈りという仕事には落ち穂ひろいがくつついていますが、コンバインによる稲の収穫技術にはそれがありません。これも仕事と技術のちがいです。

農業技術は、百姓仕事にあったものの多くを捨ててこそ成立しました。そういうものにまといつかれたくなかったのです。田植え歌や落ち穂ひろいのことを考えていたら、田植えや稲刈りに変わる技術は形成で

70

50

きなかったからです。それによって、農業は大きな「進歩」をはたしました。農業もほかの産業と同じように、生産性という尺度で優劣ゆうれつを比較ひかくできるようになったのです。たんなる所得や収量で比較していたものが、生産性で比較できるようになっていきました。

昭和三〇年代から四〇年代のはじめまで、朝日新聞社の主催しゅざいで、当時の農林水産省の後押しで「米作日本一」の表彰ひょうしょうがおこなわれていました。一〇アールあたりの米の収量（反収たんしゅうと表現していました）を競まきつたのです。村の予選を勝ちぬいた百姓は、郡の予選、県の予選をへて、県代表として全国の決戦にのぞみ、日本一米がとれた優勝者が決まっていたのです。^④米作日本一になった百姓の田んぼの畦あぜには、翌年は草が生えなかったそうです。見学者が殺到さつたうして畦を歩くので、草が伸びなかつたのです。この時代の多収技術は、まだまだ近代化技術ではありませんでした。なぜなら、労働時間など無視して、丹精たんせいこめて時間を惜おしまずに、田んぼの土づくりをし、苗を育て、田植え後も田んぼと稲に情愛を降りそそいだのです。

この時代までは、まだ技術と仕事が分離ぶんりしてはいなかったのかもしれない。しかし、すでにその兆きざしはあらわれていました。そもそも国家の要請ようせいによって、この多収のコンクールはおこなわれていたのであって、あくまでも外部からもたらされた動機ではじまり、盛り上がったのです。米の収穫量で日本一になることが、どうしてそんなに重要なことなのでしょう。ここにはすでに、落ち穂ひろいや田植え歌の世界はもうありませんでした。まして、田んぼのオタマジャクシやトンボにとつて、何の意味があつたでしょうか。

ようするに、技術に欠けているものは伝統的な世界観です。それは自然観と人生観じんせいかんを含くみます。現代の技術にはこの両方がありません。ある

95

75

のは、これにかわった経済観と人間中心主義です。

(宇根豊『農は過去と未来をつなぐ』)

*本文は作問の都合上、一部表記を改めてあります。

※1 早乙女……稲の苗を水田に植えつける女性。

※2 粃……稲の実の部分。粃がらをとったものが米。

※3 しきたり……以前からそのようにしていたこと。

※4 畦……田んぼの周囲に土を盛って境としたもの。

※5 窃盗……他人の所有物を盗み取ること。

問一 (1) (3) に当てはまる言葉として最も適当なもの

を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ なぜなら

ウ しかし エ むしろ

問二 ——線部①「労働時間を節約する」とありますが、「節約」した

労働時間は何のために使われましたか。その説明として当てはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア より多くの収入が得られるように、耕作地を拡大するため。

イ 新しい農業用機械を購入するのに、他の職業で収入を得るため。

ウ 田植えや稲刈りが終了したあとに、お年寄りがみんなで旅行するため。

エ 畜産業や野菜や果物畑など、稲作ではない仕事を始めるため。

問三

②

に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 落ち穂ひろいは百姓はしてはいけない

イ 落ち穂ひろいは無断ではいけない

ウ 落ち穂ひろいは百姓がしなければならぬ

エ 落ち穂ひろいは大勢でしなければならぬ

問四 A に当てはまる言葉として適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア あたえる
- イ もらう
- ウ いただく
- エ つくる

問五 — 線部③「百姓という仕事の共通性」とありますが、日本と西洋に共通する考え方を本文中の言葉を使って答えなさい。

問六 — 線部④「米作日本一になった百姓の田んぼ」とありますが、その「田んぼ」についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 時間を惜しまずに品種改良に取り組み、多収可能な稲を植えた田んぼ。
- イ 土作りから田植え、収穫まで十分に時間をかけて米作りにはげんだ田んぼ。
- ウ 多くの収穫を得るために、さまざまな機械を使って作業を行った田んぼ。
- エ 国家からの協力を得て、最新の技術を駆使して作りあげた田んぼ。

問七 — 線部「仕事にあって技術にないもの」について、次のように話し合いました。①④に当てはまる言葉を、それぞれ指定された字数で本文中からぬき出しなさい。

Aさん 農業では、「技術」が成立すると「仕事」にあったものの多くが捨てられていく、とあるけど、米作りにおいて、捨てられていくものと、成立した「技術」はそれぞれどんなものだと考えられるかな。

Bさん 田植えにおいては捨てられていったものは「歌や会話」で、成立した「技術」は「①三字」になるよね。

Cさん 稲刈においては捨てられていったものは「②六字」、成立した「技術」は「コンバイン」にあたるよね。

Dさん そしてこの作者はかつての「仕事」にあったものは「③七字」を含む伝統的な世界観、「技術」にあるものは「④十字」と述べてまとめているよね。

三

①～⑩の——線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに直して答えなさい。

- ① 校歌をエンソウする。
- ② 大陸をジユウダンする。
- ③ チヨウヘン小説を読む。
- ④ セキニン感が強い。
- ⑤ 両手を合わせてオガむ。
- ⑥ 国連に加盟する。
- ⑦ 著名な作家。
- ⑧ 特異な才能の持ち主。
- ⑨ 一部始終を聞く。
- ⑩ 平素の行いに現れる。

四

①～⑤のことわざについて、よく似た意味を表すものを後のア～オから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① ねこに小判
 - ② 泣き面にハチ
 - ③ 蛙の子は蛙
 - ④ 猿も木から落ちる
 - ⑤ ぬかにくぎ
- ア のれんに腕おし
イ 馬の耳に念仏
ウ 瓜のつるになすびはならぬ
エ 弱り目にたたり目
オ 弘法にも筆のあやまり